

# 開成校新聞

発行 開成中等新聞局  
発行責任者 三上 阿部  
顧問 三上 阿部  
編集長 阿部 佐野  
\* \* \*  
制作者 阿部 佐野  
小笠原 佐藤 (社)  
真田 長田

## 紙面紹介

2面 リーダー会議  
3面 屋久島  
4面 大雪と休校

# 地震多発 授業中に揺れも



▲防災対策について語る渡辺先生

2025年12月12日の11時44分頃、青森県東方沖を震源とするマグニチュード6.7の地震が発生した。震源に近い函館市で震度4、札幌市でも震度3を観測し、沿岸部には一時、津波注意報が発令された。学校でも授業中に地震が起こり、生徒が机の下に身を隠すなどの緊急対応が取られた。今回の地震を受け、当時の状況や本校の災害対策の実態に迫る。

今回の地震について取材に応じた渡辺先生は、「2015年の開校以降、本校で実際に地震対応を行ったのは今回が初めて」と語る。2023年4月にはJアラート発令に伴う緊急対応を経験しているが、地震への実践的な対応は初のケースとなった。地震発生時、教職員は役割分担に基づい

## 授業中の地震、留学生の反応は？

地震が発生した12月12日、開成にはシンガポールからの留学生が訪れており、飯塚南帆さんは、思いがけず地震大国・日本の文化に触れる機会となった。地震発生時にシンガポールからの留学生が訪れており、飯塚南帆さんは、思いがけず地震大国・日本の文化に触れる機会となった。地震発生時にシンガポールからの留学生が訪れており、飯塚南帆さんは、思いがけず地震大国・日本の文化に触れる機会となった。

て行動し、教室にいた教員は生徒に机の下に身を隠す等の安全確保を指示し、落ち着いた行動を促した。授業のない教員は廊下やトイレにいた生徒の安否確認を行い、事務部職員は非常口の確保など、避難命令に備えた態勢を整えていたという。

本校では防災計画と危機管理マニュアルを策定し、地震や火災、不審者対応など、様々な事態を想定した内容となっている。これらに基づき、避難訓練を今年3回実施しており、今年度はすでに火災、地震、不審者を想定した訓練を行っている。

渡辺先生は「先生方が動いてくださったお陰で、ある程度対応ができた」と評価する一方、「初めての地震対

## 地震の瞬間 分かれた行動

（実験室）

地震発生時、生徒が置かれていた状況は様々ではなく、場所によって対応にも違いがみられた。一方、反対側のコーナで活動していた生徒は速報に気づかず、避難した生徒からの呼びかけによって避難を開始した。幸い揺れ始める前に避難は完了したが、状況次第では危険も伴い

4年生がバレーボールの授業を受けていた。荷物片側の壁際に寄せられていたため、付近で活動していた生徒は地震速報を受け、状況次第では危険も伴い

実際に機能したか検証する必要があり」と、実際の対応の難しさも明かした。特に避難の面については「今回は体育館への非難に至らなかったが、実際に避難を行うとなったときには、マニュアル通りの動きができない可能性もあった」と振り返った。

特に教科教室型の授業形態では、生徒の所在把握や避難誘導が複雑になるという。昨年のIDUで実施された不審者対応訓練では、普段とは異なる教室配置の中での避難を想定したものであったという。渡辺先生は「地震や火災など、災害の種類が変われば場避難経路自体も変わる可能性があり、どこまで想定できるかが今後の検証課題」と指摘し、多様なケースへの対応に苦労をにじませた。

# 校内の防災対策 万全に

今回の地震を通して、同時に、生徒一人ひとりの防災意識を問いた

# 生徒が議論する新たな学校づくり 市内の執行部員が一堂に会する

2025年8月に開催されているこのイベントには、生徒の声を集めたり、児童会や生徒会の生徒同士が意見交換を行う「子ども運営委員会」が選出され、活動し、今年度は日章中、中央中、宮の森中、啓明中の生徒会執行部がその役割を担った。

このイベントは生徒が集まり、各学校・地域をより良くするために意見交換をする場として企画された。2024年度から開



▲さっぽろっこサミットの当日生徒が話し合う様子  
(北海道新聞8月19日より引用)

「自分が大切にされている」と実感できる学校づくりとは」という内容で、付箋を用いながら議論を行い、学校づくりに関連する環境や活動、生徒の意

## 開成生が感じた 執行部の在り方

山内さんと平野さんが参加して得られた成果は「これからのよりよい学校のための活動方針が固まったこと」で、理由は「議論の中で生徒の意見をより学

また議論では生徒の積極的な学校活動への参加や、安心できる学校づくりについて、生徒会の改善点も話し合った。そのときに生徒会の格式張った印象を払拭し、生徒と生徒会の距離感を縮めることが必要なのではないかと今後の本校における

## 高校生向け「生徒会交流会」も開催

2025年12月8日に市立高校の生徒会執行部が集い「生徒会交流会」が開かれた。本校からは4年生7名、3年生3名が参加した。開成運動交流祭の代表として参加した

運動会にトーナメント制を採用している他の学校では、勝敗によって観戦時間の差が生まれてしまうため、試合の応援ルールを改定し、学年全員が観戦できるように工夫を行っていたという。本校で

も観戦時間を楽しめるよう今年度は応援団を募集するなどして、様々な新しい取組を行っている。また「中高一貫ということもあり、他の市立高校とは違う開成ならではの可能性を感じた」と話す。その可能性の実現のために「生徒からのアイディアやニーズを活かしていきたい」と思っていますとまとめた。



▼小林 奏央さん

## 市教委が目指す生徒の姿

札幌市内全域から中高生が集まって考える学校づくりにおいて、市教委はどんな思いを込めたのかを、札幌市教育委員会の丸山指導

トナー校区の自治的な活動を活性化できると考えたため」と話す。「プラスのまほう」とは札幌市教育委員会が2022年度に制定したものであり「前向きに考え、互いを大切に、笑顔があふれるように」という願いが込められている。これは、札幌市の教育が目指す人間像の「自立した札幌人」に結びつく。

自信を持って発表し、他の学校の取り組みを聞いて自分たちの学校に生かそうとしてほしい」と語った。交流を通して、自分たちの取り組みに誇りや価値を見出し、相手の良さも知ること、互いの良さを感じられるようになってほしいと思いを寄せた。

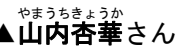
本イベントを開催した経緯について札幌市教育委員会は「子どもたちの手によって制定された、さっぽろっこ宣言『プラスのまほう』に込められた思いの現れに向けて、各学校の取り組みを交流したり、テーマに基づき話し合うことで、各学校やパー

こういった姿を目指すために「自分たちが取り組んでいることを

今後はより多くの子どもたちと教職員に「さっぽろっこサミット」を含む自治的な活動の価値を感じてもらえるように発信していきたいと話した。  
(阿部愛歌)



▼平野心都さん



▲山内杏華さん

# 開成校新聞

## 屋久島で触れる大地と宇宙

### 11期生 12名が3か所を訪問

11月27日から4日間、11期生12名が本校のSSHプロジェクトに参加し、熊本県水俣市から種子島、屋久島の三か所にて研修を行った。本号では、その様子を紹介する。

研修初日、現地に到着後、国立水俣病総合研究センターや水俣病情報センター、水俣病資料館を訪問し、知見を広げた。

国立水俣病総合研究センターでは、職員の方から、水俣病やその原因物質、水銀についての講演をしていただいた。水銀は私たちの身近なところに存在する

▲縄文杉の前で集合写真を撮る生徒たち



では訪問したことなかった種子島酒造で研修を行い、本格焼酎の製造工程や、原料についての説明を受けた。

職員の方は原料について、「試行錯誤を重ねた結果、最も良い芋焼酎を生み出したのは、種子島の芋と水道水という地元の素材だった」と力強く語っていた。

午後はJAXA種子島宇宙センターを訪れ、バスツアーを通して大型ロケット発射場やロケットガレージなどの施設を紹介を受けた。

また、市民の生活と宇宙開発がどのように両立されているのかについて理解を深めた。



▲ロケットガレージ

3日目は、屋久島トレッキングを行った。この日は早朝から登山を開始する必要があるため、午前5時前に起床し、午前6時40分頃からトレッキングを開始した。トレッキング中は、ガイドの方による屋久島の自然環境や歴史についての解説、生徒からの質問に対しての説明や、屋久島の標高によって変わる植生などの観察によって学びを深めた。さらに屋久杉やウィルソン株、野生のヤクシマザルも

見られた。トレッキングの終点では、縄文杉を見ることができ、感慨深い表情で縄文杉を見上げたり、記念撮影を行っている生徒の姿があった。往復11時間の長い道のりではあったが、全員が無事に下山することができた。

最終日は、世界遺産センターと屋久杉自然館を訪れ、屋久島の生態系や保護活動について学んだ。他にも屋久杉自然館では、5mにもなる大きな縄文杉の枝(いのちの枝)が展示されていた。多くの生徒がいのちの枝に触れたり、体験しながら学びを深めていた。

最後に、偶然開催されていた第2回春牧盛久祭りに立ち寄り、地域に受け継がれてきた文化に触れた。会場では伝統的な音楽が披露され、多くの来場者で



▲宙飯屋のカツカレー

2日目はJAXA種子島宇宙センターの敷地内にある宙飯屋で昼食をとった。宙飯屋は社員食堂になっており、JAXAで働いている職員の方の様子を間近で見ながらご飯を食べることが出来る。また、一般の方も利用可能なため、子どもや外国人観光客などの姿も見られた。多くの人が賑わっていた。

## 宇宙に一番近い食堂

最後に、偶然開催されていた第2回春牧盛久祭りに立ち寄り、地域に受け継がれてきた文化に触れた。会場では伝統的な音楽が披露され、多くの来場者で賑わっていた。多くの来場者で賑わっていた。

## 森に抱かれる宿時間

魅力を感じられる工夫が施されていた。また、木の温もりを直接感じられるよう館内ではスリッパが用いられず、庭園にはハイビスカスなどの南国植物が植えられていた。料理には、トビウオを一匹丸ごと揚げた唐揚げや地元で獲れた魚の刺身、屋久島の特産品であるたんかんを使用した料理などが振る舞われ、屋久島ならではの味覚を感じられる内容となっていた。



▲トビウオの唐揚げ

本プロジェクトに参加した水藤亜優さんは、「現地に足を運び、人々と環境と対話することで得られる新たな学びが多く、関心のある分野だけではなく他の分野の知見も深められる貴重な経験だった。今までの経験と学びを活かして、分野を超えた探究ができる有意義なプロジェクトだった」と熱を込めた。

(佐藤壮笑)

# 雪による被害長期にわたる

## 今冬一度の休校

### 夏の猛暑も含め年度内3日目

**2026年1月下旬** 今季は1月26日と2月19日に臨時休校となった。本校では二度の休校、1週間にもわたる登校時間の延長と授業時間の短縮、放課後活動の中止の措置が取られた。

この大雪により多くの生徒の登下校に影響があると判断され休校になった。また、大雪によって歩道幅が狭くなったり、建物の屋根からの落雪も見られ、生徒の登下校の安全確保が難しいと判断したためである。

また今年の冬は寒暖差が激しく、地下鉄元町駅から本校までの約1・2キロメートルの路面は人々の通行に被害をもたらした。



▶ 道路脇に高く積み上がる雪山

### 9時登校時の時程

	時間
登校	~09:00
出欠確認	09:00~09:15
1セッション目	09:15~10:45
2セッション目	10:55~12:25
コスモタイム	12:25~13:25
3セッション目	13:25~14:55
4セッション目(前半)	15:05~15:50
4セッション目(後半)	15:50~16:35

▶ 9時登校、90分授業の時程

また今年の冬は寒暖差が激しく、地下鉄元町駅から本校までの約1・2キロメートルの路面は人々の通行に被害をもたらした。

日中の暖かきにより下校時には、車による水はねが生徒にかかる



▶ 道が狭まった歩道

### 放課後活動への影響多大

登校時間変更期間は夜間の下校も危険なことから、放課後活動が全て中止となった。その影響が、各活動に及んでいる。

後期演劇部は毎年2月・3月ごろに開催している定期公演が見送りとなった。

軽音楽研究班で練習が行われた。最後に、本校の

は、2月に予定していたライブを延期し、3月の開催となった。

管弦楽部では、卒業式前の楽曲練習ができなくなっただけでなく、後期生しか活動が出来ない日に急遽、前後期生合わせての合同練習が行われた。

新聞局においても、冬期休業後の活動が少なくなり、開成校新聞の発行が大幅に遅れている。

新聞を楽しみにさされている読者の皆さんや、取材を受けて下さった皆さんに、お詫び申しあげたい。

(阿部愛歌)

被害があった。一方で、夜の寒さにより道路の水が凍り、朝の登校時には凍結した雪道を歩かざるを得なかった。

本校も屋根からの落雪を懸念し、2月20日には野球場側の道路が通行禁止となった。落雪は人的被害をもたらすため、登下校中に限らず気を付けなければならぬ。

今年度は夏の猛暑に続いての休校で、一年間のうちで3日も休校になったことは今までなかった。猛暑による休校は23年度、24年度に続く3年連続であり、豪雪による休校は22年度以来である。近年の異例な気象が生徒の学校生活に影響をもたらしている。

今年度は雪害に対応するため、休校後の登校日も9時登校、そして授業時間も90分授業に短縮された。

このことについて、教務部長の山崎恒輝先生は「教員全員で考え、この授業形態はやむを得ない対応だった。休校や授業短縮で大変になった教科もあつたと思う。特に、評価のための授業時間が減ってしまった教科は、相当大変だったはずだ」と教職員の苦労をあらわにした。

(阿部愛歌)